

飛 翔

C★NOVELS大賞作家アンソロジー

多崎 礼

涼原みなと

海原育人

黒川裕子

天堂里砂

鹿屋めじろ

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の29頁分を収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

哭く骸骨 八百万の神に問う

多崎 礼

イラスト▶天野英

6



まいごの×2 おやまのこ 萬屋あやかし事件帖

天堂里砂

イラスト▶ひだかなみ

32



エーラン覚書 光の樂園

涼原みなと

イラスト▶岩崎美奈子

58



卒業前、冬の日 真名事件調査記録

鹿屋めじろ

イラスト▶オンダカツキ

84



ランの一日奇術入門 空飛ぶ貧乏騎兵隊

黒川裕子

イラスト▶上原たき

108



理不尽との遭遇 蓮華君の不幸な夏休み

海原育人

イラスト▶しまどりる

134



COMMENTS

160



ごあいさつ

新しい書き手と出会いたい——新人応募の賞として、C★NOVELS大賞を設立し、すでに八回、十七人の新しいC★NOVELS作家を送り出すことができました。これも読者のみなさんの応援のおかげと深く感謝いたしております。

さて、感謝の気持ちをこめて、アンソロジーをお届けいたします。新星たちそれぞれのシリーズの書き下ろし外伝競演を、どうぞお楽しみ下さい。

二〇一二年十一月刊行の『躍進』と今回の『飛翔』。現代物があれば正統派ファンタジーもあり、ヨーロッパ風舞台の物語があればアジアな雰囲気のものもあり……バラエティ豊かな二冊となりました。お気に入りの作家の作品はありましたでしょうか。また、初めて読んで好きになった、そんな出会いになれば嬉しいです。

C★NOVELSではこれからも、心躍るような、面白い作品を刊行してまいります。

今後ともなおいっそうのご愛読をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

C★NOVELS編集部一同



飛翔

C
★
N
O
V
E
L
S
大賞作家アンソロジー



哭く骸骨 八百万の神に問う
多崎 礼 イラスト／天野英

さアさ、お集まりの皆々様。

本日語りまする講釈は

あの伝説の音導師。おんどうし

シン音導師が若き日に

出会いましたる不可思議な

哭く骸骨がいこつの物語。

さアさ皆様、目を止めて

足を止めてのご静聴。せいちょう

よろしくお頼み申します。

それでは、

始まり始まり——

*

時は春。

所は『楽土』、イチノ里。らくど さと

花街の妓楼『葛ノ葉』の新造部屋。その窓枠に腰

掛けて、書を読み耽る一人の娘。新造というにはやや幼すぎ、禿かぶろというにはやや小汚い。癖のある黒髪は結い上げるにはまだ短く、首の後ろでちょこんと束ねられている。柔らかな唇くちびるに、あどけなさの残る頬ほほ。しかし深緑色の瞳は切れ長で、どきりとするほど大人びている。

それもそのはず。

この娘こそ、後に『伝説の音導師』として語り継がれることになる、シン音導師その人である。

だがこの時、彼女はまだ十歳。すでに己の『音叉』を得て、一人前の音導師として独立していたが、シンの字名を知る者は少なく、仕事の依頼もまったくない。金もなければ家もない。というわけで、幼馴染みが住む『葛ノ葉』に転がり込んでいたのだった。

「イーオン！ また昼間からだらだらしておって！」

シン音導師を字名でなく、名前で呼ぶのはこの部屋の主。その名前をガガという。『我』は『雅』と

書いて『我雅』である。魂と等しく大事とされる
 音字を公開して憚らない剛胆な彼女は、イーオンよ
 り二つ年上の十二歳。この『葛ノ葉』の新造である。
 とはいえ雅やかな上衣を着こなす姿は艶やかで、す
 でに一人前の娼妓の貫禄を備えている。実際彼女
 は水揚げ前にもかかわらず、大勢の顧客を抱える
 若手の稼ぎ頭だった。

そんな我雅からしてみると、日がな一日部屋に籠
 もって音討議書を読み耽るイーオンが、不甲斐なく
 て仕方がない。

「おぬしも少しは働かんか！」

「……面倒臭い」

「巫山戯たことを抜かしている場合か！」

我雅は一枚の貼り紙をイーオンに向かって突き出
 した。

「ほれ、仕事の依頼じゃ」

イーオンは音討議書から目を上げ、胡乱な眼差し
 で我雅を睨む。

「余計なことを——」

「やかましい！」

反論を封じ、我雅は貼り紙を押しつける。

「イチノ里の西の際にある墓地。あそこで骸骨が泣
 いているそうじゃ」

死者の魂が登るといわれる霊峰『常世ノ山』。『楽
 土』はその麓にある。その名の通り、あの世に一番
 近い場所である。そのためか『楽土』では怪談に事
 欠かない。楽土生まれの久仁人達ならば、自身が体
 験した幽霊談の一つや二つ、持っているのが当たり
 前という土地柄だ。

「墓場に幽霊など珍しくもない」

イーオンの言葉は至極まっとうである。

「泣きたいのなら泣かせておけばいいだろう」

「そうはいかぬ」

我雅はぐいとイーオンに詰め寄った。

「最近、墓場の傍に歩荷相手の安宿が出来てな。泣
 き声が煩くて眠れないと苦情が出ておるのじゃ」

おぬし、行つて何とかしてこいと言う我雅に、イ
ーオンは不愉快そうに眉根を寄せた。

「私は音導師だ。祓い屋じゃない」

音導師とは、言葉を操る専門家のことである。

様々な問題を言葉巧みに解きほぐし、諍いを和解へ
と導くのが仕事である。悩める人々の相談に乗るこ
ともあれば、喧嘩の仲裁をしたりもする。だが、そ
れでも解決出来ない深刻な対立が生じた場合、二人
の音導師が代理人となり、公の場で意見を闘わせる。

これが『音討議』だ。音討議において、音導師は
巧みな話術で人々の同意を集め、己の『音叉』を鳴
らさんとする。といっても音導師の音叉は鳴り物で
はない。ただの金属の杖であるからして、それを共
鳴させることが出来るのは、人々の共感のみである。
ゆえに音導師は言葉を尽くして、対立する音導師す
らも説得し、すべての思いをひとつにまとめ上げよ
うとする。

しかし――

「幽霊は世の理に逆らい、死後もこの世に留まる
ような輩だ。道理がまかり通るとは思えない」

「とか言うて、本当は怖いのであろう?」

「馬鹿を言うな。幽霊が怖くて楽土に住めるか」

「ならば行つて調伏してこい。たまには真面目に
仕事をせい」

「断る」

手元の音討議書に目を戻しながら、シン音導師は
呟いた。

「幽霊退治は音導師の範疇ではない」

「ほう、どうしても嫌だと申すか」

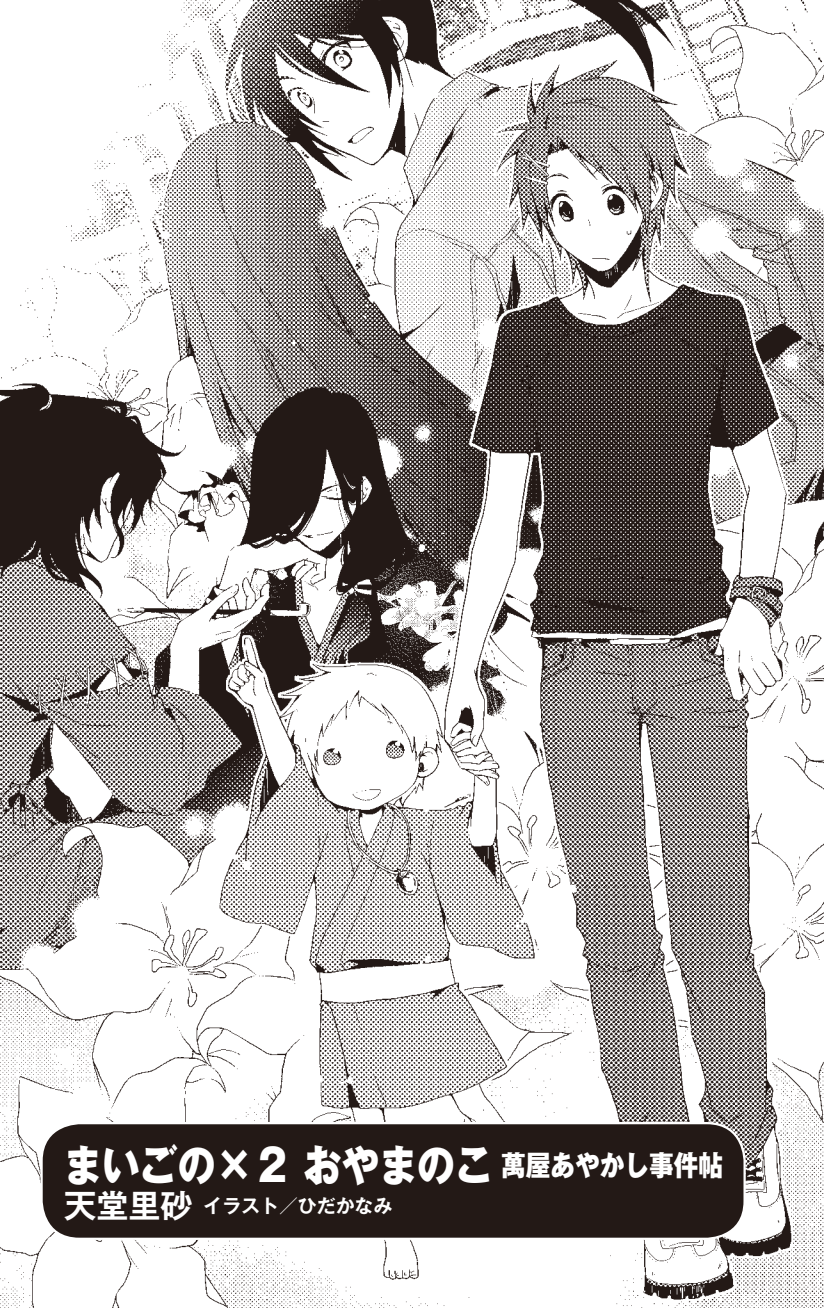
我雅はにんまりと笑った。

「では今までおぬしが飲み食ひしたツケ、今すぐ払
つて貰おうかのう?」

「う……」

「手持ちがないのであれば、自慢のその口先で、稼
いでくるしかあるまいのう?」

というわけで――



まいごの×2 おやまのこ 萬屋あやかし事件帖
天堂里砂 イラスト／ひだかなみ

「あち……」

お部屋のお掃除からストーカー撃退まで、『犯罪以外ならなんでも引き受けます』をモットーにした便利屋、萬屋山月の主である綾城穂月は、住宅の庭から道へ枝を伸ばしている庭木を見あげた。

夏の終わりを惜しむような、蟬たちの最後の合唱が降り注いでくる。

「近所さんからの『庭の草むしり』の依頼を終えた穂月は、一戸建ての並ぶ住宅街を帰路についていた。

十代の半ばを引きこもりとして過ごしてきた彼も、もう十九歳だ。小さい小さいと言われ続けてきた身長は、ここへきて少し伸び始めているが、それでも日本人男性の平均にはまだまだ辿りついていない。

しかし店から外へ出て仕事をするようになってからは、日にだって焼けたし、少しは男らしさが出て

きたと自分では思っている。とはいえ、近所の評判は『女の子みたいな可愛らしい男の子』から『ボーイッシュな女の子みたいな男の子』に変わったくらいだが。

「男の子」から「男の人」への進化には、まだ時間がかかりそうだ。

微々たるものといえども、前進していることはたしかだ。細かいことは気にしないことにする。

それよりも、

「あー、もう今日は帰ったら寝る。絶対に寝る」

すっかりヘトヘトになって歩いている穂月は、一人呟いた。

いくら真夏を過ぎたとはいえ、正午をまわったばかりの日差しはまだ強く、気温も高い。朝の早い内に草むしりを終わらせようと思っていたのだが、広い庭で権勢を誇る雑草は、なかなか手強かった。気がつけば昼を過ぎ、Tシャツは汗でぐっしょり。仕事先でシャワーを借りた上に昼ご飯までいただく有

様である。

萬屋は基本、ご近所の雑用を引き受けているため、お客のほとんどが顔見知り、それどころか夕飯のおかずを持たせてくれるような間柄だったりする。引きこもりだった穂月が外へ仕事に出るようになってからは、さらにみんなのお節介せうかいに拍車はくしゃがかかった気がしていた。

「ありがたいけどさ」

あつさりと暑さに負けて、だらだらと歩いていた穂月は、萬屋まであと十分、というところで奇妙なものを目にして足を止めた。

二歳くらいの子だ。道の真ん中で、きよろきよと辺りを見渡している。そんな年頃の子どもが一人で歩いているはずがない。親とはぐれてしまったのだろうか？

思わず駆け寄りそうになった穂月だが、思うことがあり、一旦動うごきを止めて少年を観察した。

幼い顔に黒目がちの汚けがれない瞳、膝小僧ひざこぞうが見える

ほどの丈たけの短い青い緋かすりの着物を着て、素足すあしでぺたぺた歩く姿は、『二世前の子供』という趣おもむきがある。現代社会では非常に違和感があるが、百歩譲ゆるつて、それは親の趣味なのかもしれない。

引き続き男の子を見守っていると、今度は、道の向こうから現れた、これも危あやなっかしげな足取りの女の子を連れた女性に向かって嬉うれしそうに走り出した。あれが母親なのだろうか。

しかし、彼が一生懸命話しかけても、親子連れは目の前に男の子が存在しないかのように、見向きもせず歩あき去さってしまう。

——ああ……これは、たぶん……。ア、い、か……。

歩いていつてしまった親子の後ろ姿をしょんぼりと見送みおくった男の子は、気持ちきもちを改あらためたように、ふたたびきよろきよろし始めた。

しかし道を歩く人たちは、誰一人として和の装いでうろちよろする可愛らしい男の子に気づかない様子で通り過ぎる。

「……」

どうやらツレは、穂月の予想通りアレのようだ。

——よし！ 俺も関わらないことにしよう！

何も見なかったことにした穂月は、その場で回れ右をしようとした。しかしその瞬間、まるで計ったかのように、幼い少年とばかり目が合った。

「あっ！」

「げっ！」

思わずダツシユで逃げようとしたが、ぴよんと穂月の頭上高く跳ねた男の子は、ぴたりと彼の前に着地する。にこにこと嬉しそうに笑って見あげていた。

「おにいちちゃん、みえるの？」

「視えません。俺には何も視えません」

応えた時点ですでに手遅れだが、穂月は目をつむって両耳を押さえた。薄目を開けて見おろせば、男の子は愛らしい笑みを浮かべたまま、穂月を疑いのない眼差しで見あげている。

無垢だ。

無垢すぎる。

こんな子供を無視しようとしている自分は、なんて心の汚れた大人だろう。いやしかし、厄介ごとはごめんである。

だが……っ！

なんだこのちっこくって可愛い物体は！

いやいや駄目だ、駄目だ！

ほだされるな、俺！

だってこいつは、《妖怪》なのだから！

「ねーねー、おにいちちゃん」

「……」

「おにいちちゃんは、みえるんでしょ？」

必死に視線を逸らす穂月をもっともせず、嬉しそうな表情の幼子は彼のTシャツの裾を引っ張る。

「コダマのことみえるにんげんがいるってこと、コ



エーラン覚書 光の楽園

涼原みなと イラスト／岩崎美奈子

薄手の陶皿に入った一面のひびのごとく、エディン第三期統一王朝マールス朝に翳りの亀裂が走ったのは、マールス四代目の神皇の時。

ガタツ――

戸が揺れた音に、炭筆の先を紙から浮かす。

机の端に置いた灯明皿では、溶けた獣脂がさざ波を作り、紡錘形の炎が大きく伸び縮みしていた。

ひどい隙間風だ。鉄帯を貼った厚い板戸を震わせるほどの強い風が、外を吹き荒れているのだ。

ごうごうと唸る風音に注意深く耳を澄ませたあと、炭筆の黒い芯を、再び紙に向かわせる。

翳りの始まりは、天空神ボールの光が燦然と降り注ぐ至高所に坐す、神皇の足元に生まれた。

頭上に戴く光が眩いほど、足元の影は濃くなる。

諫めた者たちは底知れぬ闇に落ち、口をつぐんだ者たちは歪んだ光に迎合するか、あるいは自らの影を、都に野に紡ぐ。擾乱は疫病の勢いで、エディン全土に広がっていった。

1

（あいつ、浮いてるな）

宿場の男を呼び止めた旅僧を、傾いだ家の陰から遠く見つめ、エーランは目を狭めた。

宿場といっても、街道の支線に拓かれた小さな村だ。道沿いに並んだ家々は低い土壁に草葺屋根が載る粗末なもので、一見、辺りの草原に連なるこぶ山と見分けがつかない。ただ、でこぼこ加減は宿場のほうが勝っていた。半分近くの家が柱や軒を叩き折られ、傾いているからだ。

そんな荒んだ背景に、宿場の男のほうはしっくりと嵌る。粗織りの上着をひっかけたいかつい肩。夕

飯用に絞めた兎を左右に一羽ずつぶら下げる、指の節が盛り上がった手。近づかなくとも、土の臭いをおんぶん感じる。

だが、旅の僧のほうには、なんの臭いも想像できなかった。天空神ボールの光の恩寵を表す白の僧衣とマントは泥と草汁ですっかり汚れ、袖口から伸びる細い手も、フードから覗く横顔も、ひどく垢じみている。実際に近寄れば、かなり臭いはずだ。でも不思議と臭いを感じない。鄙びた宿場によくいる放浪の僧のはずなのに、それだから、まわりの風景から妙に浮いて見える。

「寢床は空いてるぜ、お坊様」

宿場の男は二羽の兎の耳を左手にまとめて持ち直し、右手で顎髭を撫でた。

「宿賃は夕飯と朝飯込みでコルヌ銅貨一〇枚。悪いが前払いで貰えねえなら、ありがたい光のお坊様といえども、食膳にも寢床にも案内はできやせんぜ。なにせこの御時世だ。つい一月前にも、神皇様のお

召し軍だか、どこぞの殿様のお抱え軍だか、ただの野盗どもだかわからんやつらが押しかけてきて、あらかた食糧を持ってかれるわ、そのどさくさにまぎれて、泊まり客には宿賃を踏み倒して逃げられるわで、たいした踏んだり蹴ったりだったんでねえ」
「それは、ご愁傷様でした」

僧は自分の咎であるかのように深々と頭を下げたあと、「二〇コルヌですな」と、肩から斜めに掛けた合財袋を開け、小さな財布袋を取り出した。

その口紐がほどかれるのを、宿場の男が眉をあげて覗き込むのと同時に、エーランの踵が地面を蹴った。土を搗き固めただけの道を兎のように跳ね、宿場の男と僧を指して駆ける。そして二人の傍らをすり抜ける一瞬、向かい合う彼らの間に手を伸ばし、財布をかすめ取った。

「え」と、僧が目を瞬かせる。

「……この、くそがき！ てめえの首も絞めるぞ、こらあつ！」

宿場の男が左手に掴んだ兎の屍を振り回して怒鳴ったときにはもう、エーランは巢穴に逃げ込む兎さながらのすばしっこさで道を外れ、こぶ山の向こうへ姿をくらませていた。

「二、三日前から居着いていた、流れ者のがきだ。まったく、油断も隙もあつたもんじゃねえ」

宿場の男が忌々しく唾を吐く。かたや財布を盗らせた僧は、あたふたとエーランのあとを追いかけた。

こぶ山の裾を回り込んで、汚れた白衣の僧がまろび出てきた。フードは肩に落ち、もつれた金髪が露わになっている。埃まみれの汗が滴り落ちる顔は、見るからに若い。十二歳になるエーランとは、五、六歳しか違わないだろう。待ち伏せていた盗人を前に、目を大きく見開いている。

「――財布を、返してください」

「返してください。じゃなくて、返せ、だろ」

エーランは呆れ顔で、息も絶え絶えな僧の手元へ

財布を放りこんだ。

僧は手の中の財布には目もくれず、エーランを見つめたまま深呼吸を繰り返す。荒い息が整うと、まぶしそうに目を細めて「ありがとう」と言った。

「あのさ、坊様。礼を言う前に、まずは財布の中身を確認したら？」

「重さに変わりがありません」

僧がおっとりとした手つきで、財布をそのまま合財袋へ戻す。エーランは自分の亜麻色の散切り髪を、ぐしゃぐしゃと左手でかき回した。

「そんなんだから、さっきのあの親爺にカモられるんだよ」

「カモられ……騙される、ということですか？」

「この辺りの宿賃で一〇コル又つてのは、法外だよ。しかも、夕飯のスープは兎の毛が浮いてる程度。蛋だらけの寢床で眠った次の朝には、その合財袋の中身がすっからかんになっている。俺はね、あの親爺から坊様を助けてやったのさ。財布を盗ったのは、坊



卒業前、冬の日 真名事件調査記録

鹿屋めじろ イラスト／オンダカツキ

「とにかく友達がさあ、ブチ切れてんのよ」

背後から、興奮した声が聞こえた。彼女の元気がいいのはいつものことだ。カチャリと、無名壮源^{むみょうそうげん}は四人分の食器を戸棚から取り出した。

夢殿^{ゆめどの}の家での同居生活にも慣れてきて、それなりに二人の間で、家事の分担ができてつつある。コーヒーは大体夢殿が淹れるのだが、今日の来客はどうやら、夢殿の方に用事があるらしい。

土曜の夜、いつものように夢殿とだったらテレビを見ていたら、檜山^{ひやま}ほのかと火ノ宮^{ひのみや}明日香^{あすか}が、突然家にやって来たのだ。

同じ学校に通っている壮源と夢殿、火ノ宮は毎日顔を合わせているが、檜山とは学校帰りに少し顔を合わせる程度で、じっくり話するのは久々だった。

しかし、その時間の溝を感じさせないほど、檜山の態度には遠慮というものがない。季節も二月に入

り、外は相当寒かったようだ。勧める前からすりこたつにもぐりこんでいるし、金ボタンが付いた白のコートは鞆^{かばん}と一緒に床の上に堂々と投げ出されている。しかも誰にことわることもなく、勝手にみかんを剥^むいて食べている始末だ。

普段は派手なギャルメイクをしている彼女だが、今日は少しだけメイクが薄めだ。最低限のアイラインしか引かれていないし、髪も巻いていないので、少し癖^{くせ}のある茶髪^{ちゃぱつ}が、そのまま背中に流れている。

メイクが薄いと檜山は、いつも学校帰りに会う時よりも、二歳くらい幼く見えた。

「もーホント意味分かんなくてさあ。メールしてこられてもどう返していいかも分かんないし、変なことと言ってまた怒らせてもめんどいしさあ。で、どーしよっかなーって思っ、頭の中にぱつと出てきたのが」

そこで檜山は言葉を切った。壮源がコーヒーを淹れながら振り向くと、彼女がぱしっと夢殿を指差し

たところだ。

「……あんたってわけさあ。重い性格してるんだからあたしの友達のことも分かるかなーと思って。

ね？ 相談に乗ってよ」

「ちよっと檜山。そんな下らない用事で、どうして私まで呼び出したの。相談くらい一人でしなさい」

檜山と同じく、勧められる前からこたつに足をつっこんでゐる火ノ宮が口を挟んだ。しかし彼女は、トレンチコートをきちんとハンガーに吊しているし、檜山よりは遠慮のある……というよりも、几帳面な性格をしているようだ。

今日の火ノ宮は、いつもは垂らしている長い黒髪を後ろできっちり縛って、顎の骨のラインが綺麗に見える。色白の肌といい、まつげの長い目元といい、相変わらずスッピンでも美しい彼女は、しかし厳しい顔で文句を言うときのように冷たく見える。火ノ宮の言葉に檜山が、んー、と首を傾げて笑った。

「まあいいじゃん？ 相談相手は多い方がいいなっていうのと、男二人で住んでる家に女一人で来るのもどうなのかなーっていう、乙女心ってやつかなー」

「乙女心はいいけど、もつと別のところで発揮しなよ。そのみかん、僕が買ったやつなんだけど」

二人のやり取りに、夢殿が不機嫌そうに口を挟んだ。一重まぶたのすっきりした瞳は特に檜山を見ることがもなく、机の上のみかんに向けられている。

前はすっきり切っていた髪が伸びて、頬に落ちるくらいになっている。男子学生としては長めの髪の毛が、夢殿のあつさりとした端整な顔立ちに影を落として、余計に不機嫌そうに見えるのだ。

檜山が顔をゆがめて、吐き捨てるように言った。

「はあ？ その箱の中身、どうせ全部みかんなんですよ？ 二人っきりで食べきれないわけじゃないじゃん。むしろ協力してやっぺんだから感謝しろよ」

「その態度がむかつくからあげたくない」

こたつの天板を挟んで、言い争いはヒートアップしている。以前から反りが合わなかった二人だが、こうやって家を行き来する間柄になっても、あいかわらず相性はあまり良くない。

くだらなさが増してきたやり取りの中に飛び込むのは嫌だなあと思いつながら、壮源は部屋の敷居をまたいだ。四人分のコーヒーを、こたつの天板の上に置く。

前髪が落ちてきたので、片手でぐいっとかきあげた。いつもはオールバックにしているのだが、さすがに休日にも、髪に手間をかけたりはしない。いつもは個性的な柄にこだわっているシャツも、今日はシンプルなストライプだ。

少し吊り気味の、眼光鋭い瞳を細めて言う。

「で、結局のところお前ら、なんの用なんだ？」

空になったお盆を腰のところで持ち直しながら、こたつの中の三人を見下ろして尋ねた。

座っている三人に上から尋ねると、自分の強面の

顔がより恐ろしく見えることは知っているのだが、今更そんなことを気にする三人でもないだろう。

案の定檜山は、壮源を見上げて、むっとくちびるをとがらせた。

「だからあ、相談したいの。友情に悩んでんの」

顔のあたりに落ちかかってくるらしい髪の毛を、払いながら言う。

家に入ってきた時から感じていたが、こうやって間近でしみじみ見ると、いつもと顔が違うなあと思ってしまう。以前に話した時に、コンビニくらはノーメイクで行くと言っていたから、この家は檜山にとって、ついに近所のコンビニと同じくらいの位置付けになってしまったらしい。

「なんかさあ、友達と変にこじれて困ってんだよ」

檜山がため息混じりに言った。いつも勝ち気な態度を崩さない檜山に似合わず、沈痛な声だ。

携帯を取り出して、メール画面を開いて二人に差し出してくる。どれどれと覗き込むと、絵文字もデ



ランの一日奇術入門 空飛ぶ貧乏騎兵隊

黒川裕子 イラスト／上原た巻

夜になり、幻想の舞台となる天幕に幾十もの篝火が灯される。それまで、サーカスはただの端布、ばね、中わた、幾ばくかの鉄塊がごったに投げこまれたがらくた入れにすぎない。

いつものように、サーカスが夢の箱からがらくた入れに戻ったある深夜、道化師の妻が三日間の苦しみのすえに赤ん坊を産み、夜が明ける前に亡くなった。妻のためにあり金はないて買った飴菓子握りしめ、道化師は途方にくれた。裏手の楽屋、妻のなきがらのそばには、古着に包まれた男の赤ん坊がやすやす眠っていた。

このまま赤ん坊を、解散寸前の貧乏一座で育てるのか。もう三月も給金の支払いがとどこおっている状況で、役立たずの赤ん坊を抱えることに、座長はうんと言わないだろう。青と黄色のひだつき衣装で大陸中を練り歩き、貴族の靴に接吻をして、かびた

黒パンと酸っぱいエールで一日を終える道化師に、この子をしたいたいと思えない。

「おい、ぼやぼやするな。明け方には出航だ。ガキにかまってる暇アねえぞ」

座長が怒鳴る。すでに天幕はほとんど解体され、船に積む荷のしたくが終わりかけていた。これから冬大陸のジント王国まで、このサーカス団最後になるかもしれない興行を打ちにいくのだ。

出航。海路から吹く風に乗って、カラツク船は竜骨を軋ませ内海へ入る。青い淵の上を通りかかる。世界の中心であり、創造主の二皇子が棲むという、底知れない穴ぐらだ。夜の淵は恐ろしく黒い。

赤ん坊はずっと泣いている。一足早く笑顔の仮面をはりつけながら、道化師は思った。

——そろそろ、篝火を消す時間だ。

道化師は、生まれたばかりの息子を船のへりから波のなだらかにうねる青い淵に落とした……とぷんと静かな飛沫が上がり……。

1 鳳凰、出稼ぎにいく

冬大陸のジント王国。王都ジントールは、短い春を迎えていた。

森の離れの王軍第一分隊隊舎で、新入り隊員によるちよつとした騒動が起きていた。

「なあ。それ、本当にどうにかならないのかよ」

幼馴染みで部下のマロイが、円卓にだらしなく肘をつきながら、胡乱げな目でモートを見る。

正確には、その肩にとまっている新隊員をだ。モートの肩には、オスの矮鷹ティボーの雛ひながわがもの顔でとまっていた。まだハトほどの大きさしかないが、鋭い黄色の喙くちばしと漆黒の爪つめは、猛禽もうきんの証だ。しかし、生まれて三月なので、頭のあたりに幼い羽毛が残っており、ふわふわ、ほよほよととてもなく可愛い。雛は、戦後の調停のためジントを訪れているキルバリン王女からの贈り物だった。

四年前にガド通りの靴屋の娘からジント王軍第一分隊——通称鳳騎兵フインパレニドワイエ隊の隊長になったモートは、この冬、四季大陸を股にかけた大冒険に巻きこまれた。幾多の困難を、ど貧乏をばねに乗り越え、結果的に世界を救うことになった。その数少ない褒美の一つが、可愛らしい矮鷹だ。

が、モート以外の隊員にはすこぶる評判が悪い。日替わりに標的を選んで、頭上に糞ふんをするのが日課だからだ。しかも、モートに男が近づくと、問答無用で威嚇いかくを繰り返す。

まだ名前のない雛が大きく嘴を開き、マロイに向かってクワーッと鳴いた。

マロイが歯ざしりする。

「ふざけんなよ鳥。むしつちまうか？ ええ？」

「大人げないぞ、マロイ。いいだろ別に。せっかくキルバリン王女がくださったんだ……」

モートは視線も上げずにそう答えると、手元の書を熱心に読みふけた。

大ジント博物館の付属図書館から借りてきた本だ。題名に惹かれて、借りずにはいられなかった。

『できる隊長の流儀―部下の育て方―』

三十年前に引退した第五分隊隊長の経験の日誌風につづった名著である。

同じテーブルで帳面に何やら書きつけていたウエーウエが、著者名にちらりと目をやって、鼠に似た顔にうす暗い笑みを浮かべる。もとは王宮の高官だったが、鳳騎兵隊に左遷され、今はモートのもとで世を嘆くばかりの根暗な四十路前だ。

「ああ、その隊長な……収賄で有名だった男だ。

最後は地方に飛ばされるわ、妻に離縁されるわで悲惨な死に方をしたらしい。死のまぎわ、財布には五分銅一枚しか入っていなかったとか……」

「……………」

モートは無言で本を閉じた。

一方、もう一人の部下、ヴァイレンは先ほどから絨毯に寝転がってカエルの合唱のようない

びきをかいている。冬大陸最強の剣士にして、下半身の不始末によって剣を取り上げられていた（ヤウエン・ネ・ヤウエン「騎士の中の騎士」）。もうじき五十の声をきこうというのに、このところ毎晩飲み歩いているようだ。

ふたたび剣を使うことを許されたのが、よほど嬉しいのだろうか。また美人局に引つかからないよう、監視を怠りなくしなければ。

モートはため息をついて、書物の表紙に視線を戻した。

よく考えれば非現実的な題名だ。

きつと彼の分隊には、金と女にだらしない（騎士の中の騎士）も、異様に迷信深い悲観主義者も、お家復興に燃え上がる青年騎士も、もちろん変態奇術師もいなかっただろう。

（それに、うちほど借金はなかったはず）

隊舎の扉が勢いよく開いた。

その拍子に、錆びた蝶番が、今にも外れそうに跳ねた。あれほど静かに開けると言っているのに



理不尽との遭遇 蓮華君の不幸な夏休み
海原育人 イラスト／しまどりる

1

よくある話だ。

難しいことなんて一つも無い。

遊ぶ金が無い。バイトの給料日は当分先。じゃあしょうがない。そこらを歩いてる知らない人から借りよう。そういう理由でカツアゲをしようとして——そしてしくじった。

ただそれだけの話なのだが。

問題は立ち塞がった男で。

2

体育の日。午後五時。コンビニ駐車場。

「やんねえ？」

と菓子パンの封を切りながらモッチーが言った。

名字の橋本から来ている渾名で、最初は『橋本ち

ゃん』だったのが『はしもっちゃん』に変化し『も

っちゃん』と略されるようになり、最終的に現在の

呼び名である『モッチー』に辿り着いた——とは本

人の弁だが、俺は単にもちもちしているからだと思

う。

モッチーは見た目小太りだ。

実は固太りで、脂肪ではなく筋肉の塊なのだが、

ぱつと見はもちもちして見える。

「やんねえよ面倒くせえ」

と嫌そうに応じたのは大島水穂。女名前だが歴と

した男で、名前にコンプレックスでもあるのか、割

と厳つい格好を好んでする。

大きめのサングラスに、威圧感たつぷりのアクセ

サリーがじゃらじゃらと。

「良いじゃん、やろうぜ」

軽やかに賛成したのは柴村大和。言葉とフットワ

ークの軽さが見た目にも出ている。

二人からの返事を受け取ったモッチーは、最後に俺を見て、

「健吾？」

と短く訊いた。

即座に反対意見が頭に浮かんだ。

悪いことは止そう。金が無いなら無いで、金のかからない遊びをすれば良い。缶蹴りでもキャッチボールでも良い。本気でやれば絶対盛り上がる。と、そんなことを熟々と考えてみたのだが。それでも。結局。俺の口からは。

「いや、まあ、俺はどっちでも」

という言葉が発せられていた。水穂が一層嫌な顔をして、一方のモッチーはパンを一口囓り、決まりだな、と笑った。

高校の同級生。

俺たちの関係を一言で説明するとそういうことになる。

金さえ払えば入学・卒業させてくれる中高一貫の男子校。俺たち四人は高校から入った口なのだが、中学の三年間をかけて作り上げられていた人間関係の中に上手く溶け込むことが出来ず、自然、四人でつるむようになり——そして現在に至っている。

高校二年。十七歳。

酒と煙草——時にはもう少し幸せな気分になれるもの——をやったり、お互いの人脈を総動員して女と知り合う機会を作ったり、時にはナンパに挑戦してみたり、とまあ、そんな馬鹿をやる集まりだったのだが。

最近、ついていけなくなりつつあった。

馬鹿がエスカレートしていた。

万引きカツアゲひったくり。果てはホームレスに対する意味の無い暴力にまで及んでいる。

酒だの煙草だのマリファナだのドラッグだのならまだ一緒にやれた。馬鹿をやっているのは自分たちだけだったし、ばれて痛い目を見るのも自分たちだ

けだったから、まだ一緒にやれた。

が。

他人に迷惑をかけるようなルールの破り方となる
ともう駄目だ。性に合わない。きつい。

ストレスが溜まりつぱなしだし、だからその手の
行為をやろうと誰かが提案する度、止して他のこと
をしよう、と言いたい自分が顔を出すのだが。

これがまあ言えない。

度胸が足りない。

諫めたとして、もし三人の不興を買い、もしあの
ホームレスたちを踏み^ふにじる暴力が自分に向けられ
ることになったら——と想像すると、途端^{とたん}に何も言
えなくなる。

空気の読めない発言をする奴だと思われて距離を
置かれることになったら、この先一人ぼっちになっ
てしまう——なんてことも同時に考えて、言葉に詰
まる。

ああ、本当に。

根性無しだ、俺は。

午後五時三十分。スーパー『ひまわり』駐輪場。

時間も時間であるせいか、『ひまわり』周辺は夕
飯の買い物に出て来た主婦や学生で賑わっていた。
かなり混んでいる。

ということとはつまり、人の目が多すぎてカッアゲ
には不向きな場所、ということになるのだが、それ
は店の表側の話。店の裏口の方に戻ると狭い路地^{せま}に
なっていて、途端に人通りが絶える。

だから表で捕^{つか}まえて裏に連れて行き、そこで金を
集^{たか}める、というのがこのスーパーでの段取りだった。

「どーちーらーにーしーよーおーかーなー」

と早速値踏みを始めたのは大和とモッチー。一人
で、金を持ってそれで、弱そうな奴、を探している
のだらうと思う。

と。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。